

よんでおきたい文学
10

少年駅伝夫

あたたかい右の手／壺井 栄

雑草／大関松三郎

仁兵衛学校／千葉省三

ジュールおじさん／河盛好蔵

栗野岳の主／椋 鳩十

あすもおかしいか／岡本良雄

朝の光／大蔵宏之

少年駅伝夫／鈴木三重吉

夕焼けの雲の下／川崎大治

やまなし／宮沢賢治

マテオ・ファルコーネ／山内義雄

百姓の足、坊さんの足／新美南吉



よんでおきたい文学

少年 駅 伝 夫

子どもの文学研究会編



子どもの文学研究会

少年 駅 伝 夫

ポプラ社 昭和48 (1973)

222p 23cm (よんでおきたい文学 10)

〔分類〕 908

よんでおきたい文学・10

少年 駅 伝 夫

編 者
子どもの文学研究会

発 行
昭和41年11月30日 初版
昭和48年3月5日 8版
©

発行者
久保田忠夫

発行所
株式会社 ポプラ社

東京都新宿区須賀町5 振替東京149271

印刷所
株式会社須藤印刷

製本所
三進製本所

(編者との話し合いにより検印廃止)

(落丁・乱丁本はいつでもおとりかえいたします)

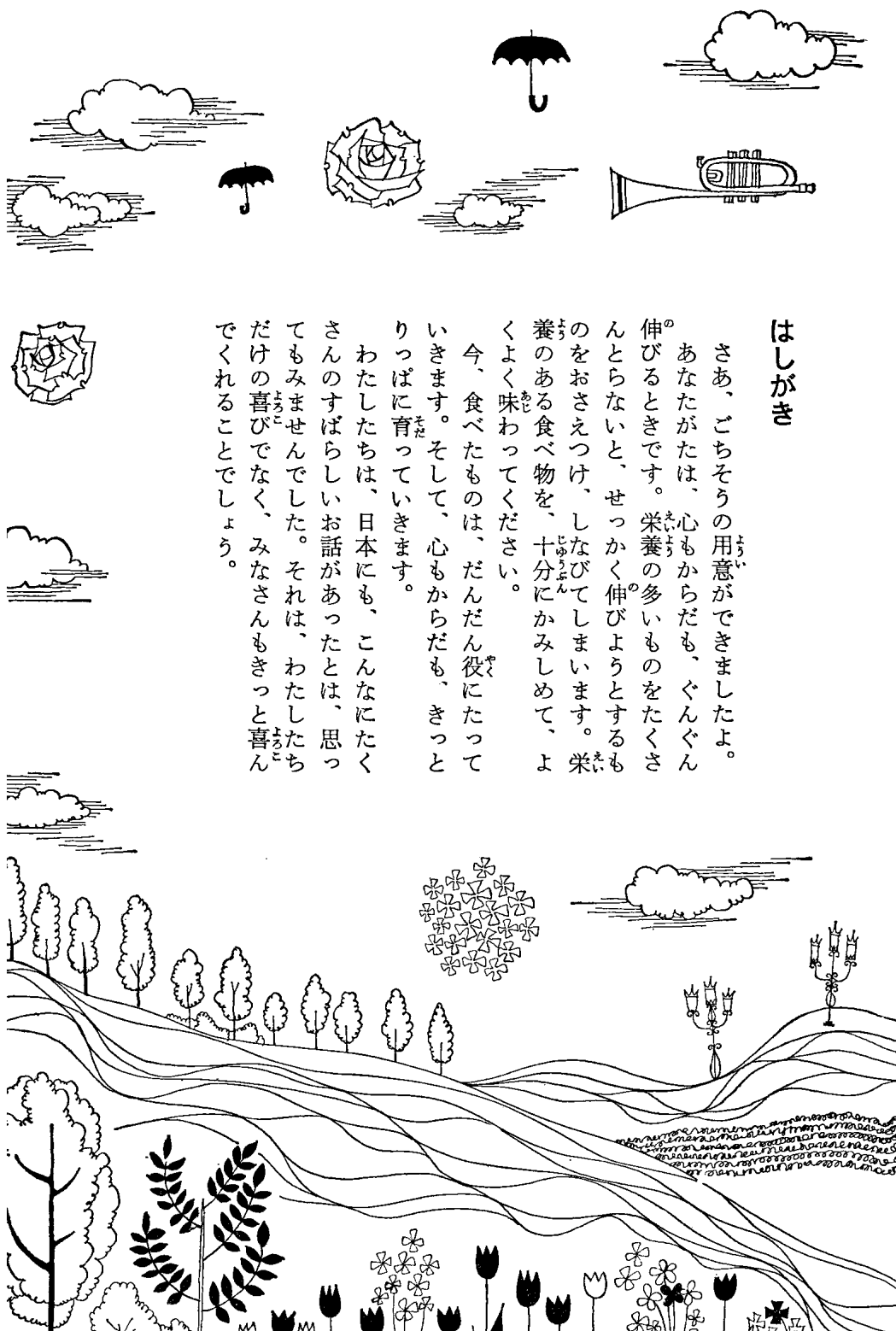
はしがき

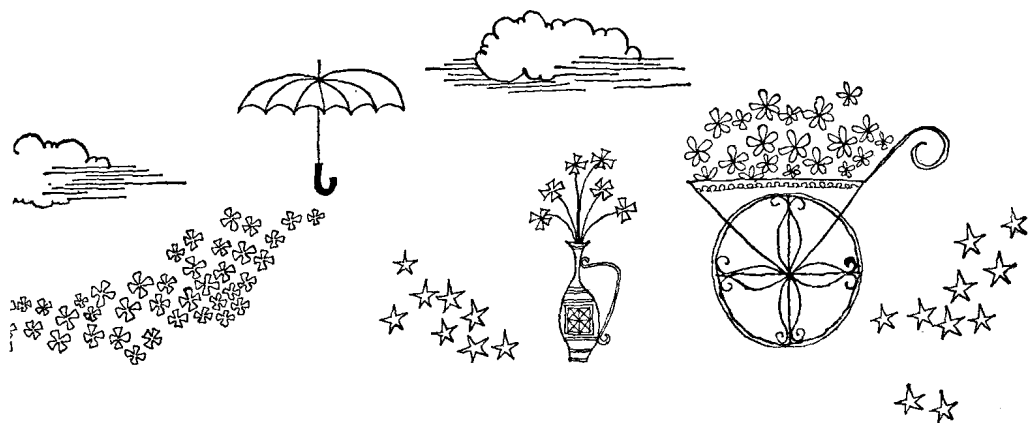
さあ、ごちそうの用意ができましたよ。

あなたがたは、心もからだも、ぐんぐん伸びるときです。栄養の多いものをたくさんとらないと、せっかく伸びようとするものをおさえつけ、しなびてしまいます。栄養のある食べ物を、十分にかみしめて、よくよく味わってください。

今、食べたものは、だんだん役にたっていきます。そして、心もからだも、きつとりっぱに育っていきます。

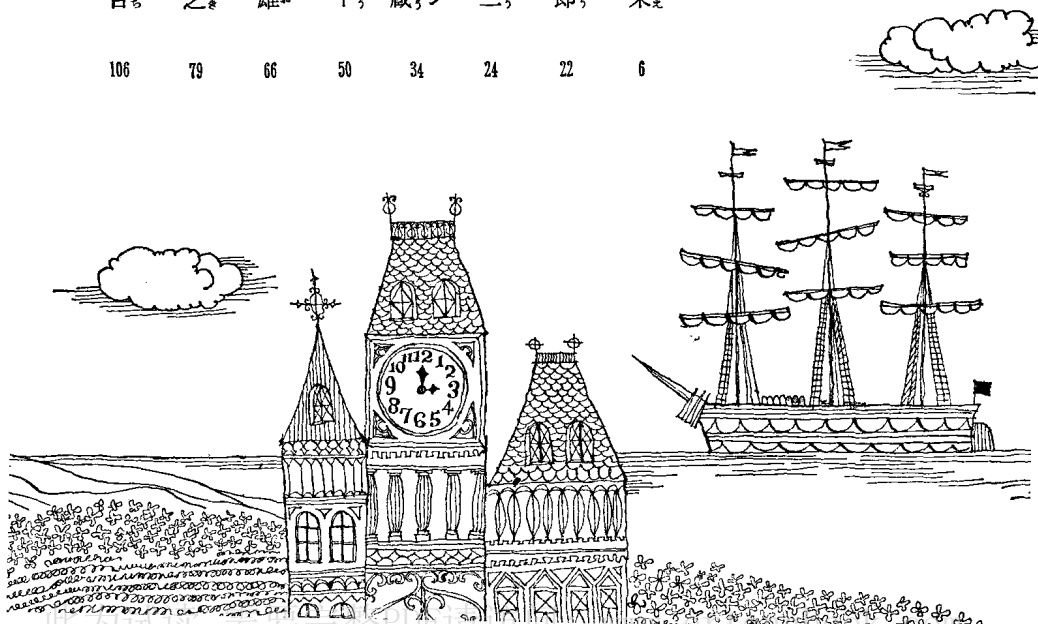
わたしたちは、日本にも、こんなにたくさんのお話があったとは思っていませんでした。それは、わたしたちだけの喜びでなく、みなさんもきっと喜んでくれることでしょう。

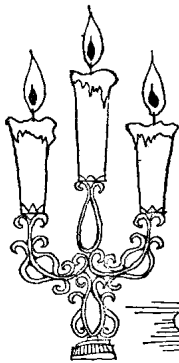
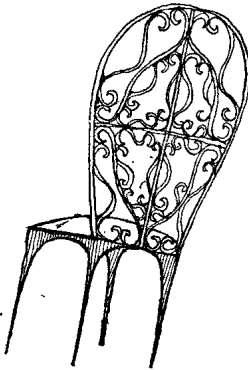
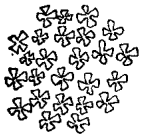
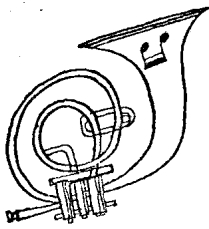




目次

少年駅伝夫 しょうねんえきでんふ	朝の光 あさのひかり	あすもおかしいか あすもおかしいか	栗野岳の主 くりのがたけぬし	ジュールおじさん ジュールおじさん	仁兵衛学校 にへえがっこう	雑草 ざっそう	あたたかい右の手 あたたかいみぎのて
鈴木三重吉 すずきみへきち	大蔵宏之 おおくらひろゆき	岡本良雄 おかもとよしお	棕鳩十 わくはとじゅう	モーパッサン モーパッサン	千葉省三 ちばしやうざう	大関松三郎 おおくしやうざう	壺井栄 つばいさかえ
106	79	66	50	34	24	22	6





夕焼けの雲の下

川崎大治

125

やまなし

宮沢賢治

145

マテオ・ファルコーネ

山内義雄

154

百姓の足、坊さんの足

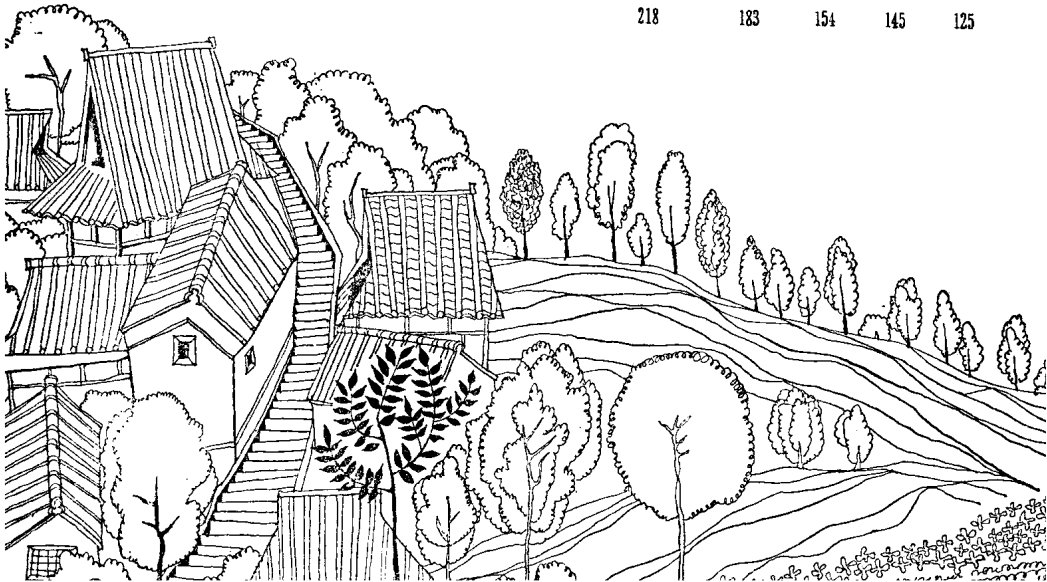
新美南吉

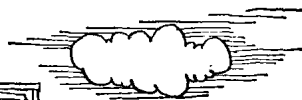
183

解説

馬場正男

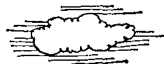
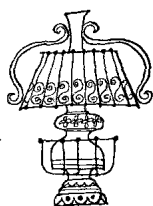
218





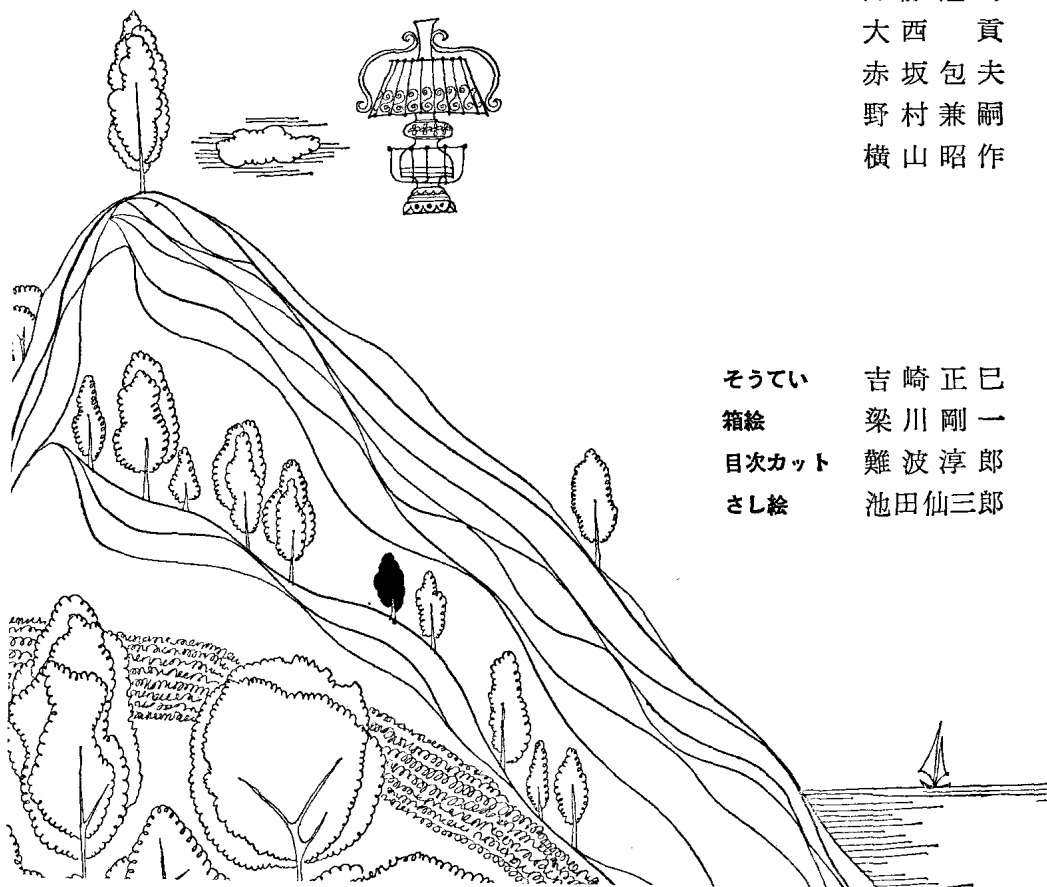
代表委員
編集委員

馬場正男
松山市造
山口正重
土田治男
桑原三郎
渡辺俊介
近藤晋二
野村純三
加大藤達馬
赤坂西貢
野村包夫
横山兼嗣
昭作



そうてい
箱絵
目次カット
さし絵

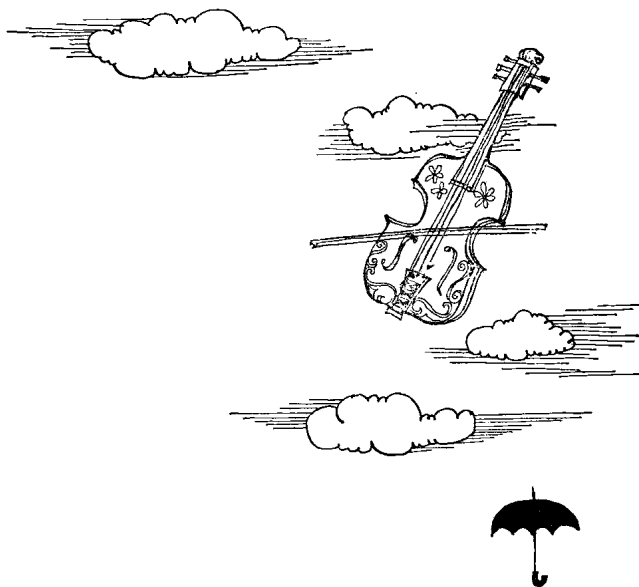
吉崎正巳
梁川剛一
難波淳郎
池田仙三郎



少年 駅伝 夫

よんでおきたい文学 10

子どもの文学研究会 編



あたたかい右の手



壺

井

栄

B組で、いちばんよくできる子、それは、名まえも、いっとうめずらしい慈雨ちゃんでした。いちばんおとなしく、そしてやさしい子、それも慈雨ちゃんでした。そのうえまだ慈雨ちゃんは、たいそう美しい目と、髪の毛とを持ってゐる少女でした。その美しい髪の毛を慈雨ちゃんは、いつもすこし長めのおかっぱにしていました。

「慈雨ちゃんの髪の毛、お人形みたいだね。」

みんなはそういって、慈雨ちゃんの頭にさわってみたりします。黒い髪の毛は、さらさらとした手ざわりで、つかんではなしても、すなおにもとにもどるのでした。いつもつやつや光っている、おおい髪の毛です。

竹子は、その慈雨ちゃんと大のなかよしでした。けれど、もって生まれたものは、およそ正反對のふたりだったのです。おなじようにおかっぱにはいるけれど、竹子のはちぢれつ毛で、毛のさき

がまくれあがっているのです。おかっぱのふたりを、いつもおとなっぽい口をきくので半オトというあだ名のせい子さんが、からかいます。

「髪の毛のおおい人は苦勞するんだってよ。慈雨ちゃん、たいへんだわよ。」
それから竹子にむかっては、

「あんた、まだ子どものくせにおしゃれね、もうパーマメントかけるなんて。」
すると竹子は、すぐいいかえます。

「いじわるね、わたしのは、しぜんのパーマメントよ。でも、うちがびんぼうだから、ずいぶんたしかるわよ。」

けれど、慈雨ちゃんは、だまってわらっているだけでした。髪の毛はそんなにおおくて、つやつやしているのに、慈雨ちゃんは、やせて青い顔いろをしているし、ちぢれつ毛の竹子は、ぶちぶちふとっていて、ひふの色もつやつやとかがやいているようでした。よくできて、やさしい慈雨ちゃんにくらべて、竹子のほうは優等生ではないけれど、快活で、ときには、いじわるもするのです。なんでも思ったことを、えんりょなく口に出している竹子は、あるとき慈雨ちゃんにいったことがあります。

「慈雨ちゃん、あんた、おひとよしね。すこし気が弱すぎるわ。もっとはきはきいわなくちゃだめだ」と思うの。自分がわるくもないのに、だまってひっこんでるなんて。」

すると慈雨^{じう}ちゃんは、竹子^{たけこ}にだけは答えるのです。

「だって、わたし、いいあいって、きらいなんですもの。」

それは、けしごむをなくした子が、慈雨^{じう}ちゃんにうたがいの目をむけて、ひにくをいったときのことだったのです。慈雨^{じう}ちゃんはぼろぼろ涙^{なみだ}をこぼしながら、自分のけしごむをあいての子にわたししました。あとから出てきたので、うたがいはとけたのだけれど、その子はいいました。

「へんな人ね、慈雨^{じう}ちゃんて。自分のものなら、そうだとはっきりいえばいいのに、くれたりするから、うたがうじゃないの。」

それでも慈雨^{じう}ちゃんは、だまっていました。そんな慈雨^{じう}ちゃんを、わざとそうしているように思えて、竹子^{たけこ}はあまりすきではなかったのです。というよりも、はがゆく思わずにはいられませんでした。まつ毛の長い、黒い大きな目から、ぼろぼろ涙^{なみだ}がこぼれ、うぶ毛のこい口もとが、ぶるぶるふるえている慈雨^{じう}ちゃんは、いたいたしくて、竹子^{たけこ}のような元気な少女^{しょうじょ}から見れば、はがゆく思うのもあたりまえかもしれません。しかし、竹子^{たけこ}はやっぱり慈雨^{じう}ちゃんがすきでした。おかつばの慈雨^{じう}ちゃんの頭を見ていると、なんだか心がやすまるような気がするからです。

「慈雨^{じう}ちゃん、あんた、学校でたら、なにになるの。」

あるとき、竹子^{たけこ}がきくと、

「あたし、どうていさまよ。」



慈雨ちゃん、見ちがえるほど明るい顔つきで答えました。

「どうていさまって、なあに。」

「あら、どうていさまは、どうていさまよ。一生、神さまにおつかえして、清らかにくらすの。」

「へえ、ほんと？ それ。」

竹子が、とんきょうな声でききなおすと、慈雨ちゃんは慈雨ちゃん、いつになくきつぱりというのです。

「ほんとうよ、それはもう、たしが生まれたときからきまっていたのよ。」

「だれがきめたの？」

「そりゃ、おとうさまと、おかあさまよ。はじめはおねえさまを、どうていさまにするつもりだったの。だけど、おねえさまはいやだっていうので、わたしがなるの。」

それは、この世でいちばんりっぱなものだ、と信じきっている顔つきでした。そのときの慈雨ちゃんは、ふだんの、あのおとなしさに光がさしたように、いきいきとして見えました。しかし、竹子には、なんだかふにおちないことでした。どうていさまって、どんなことをするのだろうか。それをはつきりと、だれにものみこめるように、説明できない慈雨ちゃんであり、またできたとしても、それのみこめる竹子ではありませんでした。そのときふたりは、まだ小学校の四年生だったのですから。けれど、それからあと、どうていさまのことは、ふたりのあいだでなんども話しあい、いつとなく竹子

もすこしずつわかってきました。日曜日にはいつも一家そろって教会へ出かけていく慈雨ちゃんの境遇でなければ考えられないこと、そんなふうに竹子は思いました。だけど、おとなになっても、お嫁にもいかないで、一生、神さまのそばでくらすという、それはいったいどんなことをするのだろうか、ふしぎでなりませんでした。とどうじに、どうていさまになろうという慈雨ちゃんの家の人たちを、心の美しい神さまのような人たちばかりのように思えて、うらやましくなったりもしました。六年生を終えるすこしまえごろのこと、竹子は、おかあさんにいったことがあります。

「おかあさん、竹子も、どうていさまになろうかな、慈雨ちゃんの女学校へいってさ。」
すると、おかあさんは、大声でわらいました。そうして、いうのです。

「じょうだんじゃないよ竹子、そんなことは信仰のあつい人たちの考えることさ。竹子みたいな俗人の子どもは、体操学校にでもいって、そのほうの先生にでもなったほうがいいよ。尼さんなんて、おかあさんは、ごめんなんだがね。」

「えっ、どうていさまって、尼さんのことなの？」
びっくりして竹子はいいました。

「まあ、尼さんみたいなものさ。日本の尼さんみたいに髪の毛はそらないだろうがね。それでも、髪の毛は人に見せてはならないそうだよ。」
そのとき竹子は、はじめて知ったのです。どうていさまは、人に髪の毛を見られたり、自分で鏡を

見たりしてはならぬことを。すると慈雨^{じう}ちゃんの、あの持つて生まれた美しい髪^{かみ}の毛^けも、白いかぶりものにかくされてしまつて、人はおろか、慈雨^{じう}ちゃん自身^{じしん}も見られないのだらうかと思うと、慈雨^{じう}ちゃんがかわいそうに思えてなりませんでした。だから、そのつぎの日、慈雨^{じう}ちゃんにあったとき、忠告^{ちゆうこ}してみました。

「慈雨^{じう}ちゃん、あんた、そんなきれいな髪^{かみ}の毛^けもっているのに、どうていさまになるの、やめなさいよ。」

すると慈雨^{じう}ちゃんは、黒い目をすこし大きくして、

「いや。」

と、かんたんに答えました。

「だって、つまらないじゃないの。神さまといっしょにくらすなんて、ちっともおもしろいこと、ないでしょ。」

「だって、もうきまつてるんですもの。」

「ふうん、でも、いやならやめてもいいいんですよ。」

「そんなわけにいかないわ。」

「だけでもさ、あんたのおねえさん、いやだって、やめたんですよ。」

「だから、あたしがなるのよ、あたしは、いやじゃないんだもの。」

慈雨ちゃん（じうちゃん）の決心（けっしん）は、なかなかとまりそうにはありませんでした。それいじょうは、竹子（たけこ）も、いうことばがなかったし、またそれいじょうは、慈雨ちゃん（じうちゃん）の自由（じゆう）なのだからと、竹子（たけこ）もあきらめました。それきり、どうていさまの話（わ）は出（で）ないまま、ふたりは、まもなく別（わか）れてしまいました。慈雨ちゃん（じうちゃん）は自由募集（じゆうぼし）の女学校（じよがっこう）にいき、竹子（たけこ）は新制中学（しんせいちゅうがく）の一年（いちねん）に進（すす）んだからです。

おなじ町（まち）なので、たまには顔（かお）を見あわすおりはあっても、新しい学生（がくせい）のいそがしさは、おたがいに小学生（しょうがくせい）のときのように、いっしょに遊ぶ相談（そうだん）をさせませんでした。ときどき学校（がっこう）のとちゅうで出あつても、慈雨ちゃん（じうちゃん）には慈雨ちゃん（じうちゃん）のつれがあり、竹子（たけこ）にはまた新しい友（とも）だちがあつたので、ちょっとことばをかわすと、ふたりは、もう新しい友（とも）だちのほうへいかねばなりませんでした。でも、慈雨ちゃん（じうちゃん）にあつたあと、竹子（たけこ）の気（き）もちは、ほんとうに、なんとなくあたためられるように思（おも）われました。

それは竹子（たけこ）にかぎらず、だれでもそう思（おも）いました。慈雨ちゃん（じうちゃん）のやさしさが、そんなふう（ふう）に人（ひと）の心をあたためたのでしょうか。慈雨ちゃん（じうちゃん）という子（こ）は、そんな少女（しょうじょ）だったのです。別（わか）れてまだ二（ふた）か月ほどなのに、慈雨ちゃん（じうちゃん）は、すこしおとなっぽくなっていました。それは、あのおかっぱ（おかっぱ）のひたいの毛（け）を右（みぎ）のほう（ほう）によせてピン（ピン）でとめていた、そのため（ため）かもわかりません。

慈雨ちゃん（じうちゃん）は、やつぱりどうていさまになるの（の）だな、それをいちばん（ばん）しあわせだ（だ）と思（おも）っているのだわ——そんなふう（ふう）に竹子（たけこ）は考（かん）えて、ある五月（ごご）はじめ（じめ）の午後（ごご）、慈雨ちゃん（じうちゃん）と別（わか）れた（た）のですが、それが

さいごの別れになろうなどと、どうして思えたでしょう。

「わたしたち、あさつてが遠足なの、もう今からてるてるぼうずをつくってるのよ。」

いつもひかえめの慈雨ちゃんが、そのときは、めずらしく、自分から話しかけてきたのです。よほどうれしかったのでしょうか。そうしてその遠足の日の、あくる日、竹子はなんにも知らずに家を出て、慈雨ちゃんのことまで忘れたまま学校にいくと、大さわぎがおこっていました。みんなが集まっているポプラの木の下に近よっていくと、いちはやく見つけたせい子が、

「たいへんよ、あんた、慈雨ちゃんが死んじゃったのよ。知っている？」

「えっ！」

「汽車のなかで、おしつぶされたんだってよ。」

うそや、じょうだんでないことは、みんなの顔つきでわかります。竹子は、わあっと声をあげて泣きだしました。竹子がだれよりもなかなよしだったことを、みんなは知っているの、いいあわしたようにだまりこんでいましたが、さそわれて両手で顔をおおうものもありました。

「ね、お別れにいつてあげなさいよ、竹子さん。」

せい子が、おとなっぽくいつて、竹子の肩に手をかけました。しかし、竹子は、いっそう泣けてくるばかりで、どうしていいか、わからなくなっていました。今すぐいつて慈雨ちゃんにあつてきたいという気もちと、こわいような気もちが、竹子をまよわせたのです。どうして死んだりしたる